

佐藤義詮先生を思う

賀川光夫

私は、昭和二十六年八月、文部省から出向、県教育庁社会教育課長として社会教育の基礎作りに取り組んでいた広中益次郎氏により、大分市荷揚町にあった佐藤義詮先生の私宅に案内された。ここで御二人の議論を充分に聞くことができた。二人の対話にはあまり目的のあることではなく、至極一般的なものであったような気がするが、次第に熱ぼくなったことだけは確かである。その議論の焦点は「自由のため」のたたかいこそ人にとってもっとも大きな喜びである」ということであつた。

ところが戦後の日本は経済発展という方向で大国への道を進んだ。その基礎はそれまで失われていた「個性」(自由)へのあこがれによって達成された。そしてそれを発展させ、維持して行こうとする時の選択は人間(社会)の管理的方向であつた。ここで、自由な発想と、それを実行するにあたって生かされた個人の力量、能力が個性的に生かされることなくよいだらうか。本来、理想というのは自由な発想から生れる創造である。学理もまた創造から生ずる機能で、その基礎には経験の必要とする。思索(哲学)も、行動(歴史)も、感応(文学や美術)も自由な発想から生まれる倫理行動である。そこで学究こそが

人間を自由にする構造だとする考えが佐藤先生の「真理はわれら自由にする」という理想であるように思われる。

「歴史は前を向いて歩む」という現実に対して、「真理と自由」を如何に解釈するかということが問題にされる時代である。情報という技術、多様化という行動、そして大衆化という現実に対応することが出来なければ「歴史は前に向って進む」という現実に立ち向かうことはできない。佐藤義詮先生の論理は、「歴史は前を向いて歩む」という現実とは矛盾しないことを「個性」の発掘という点で認識できる。何故なら、情報も、行動も、大衆化も歴史の中の現実で、それは個人個人が創造することであるので、そのことをとおして歴史が未来を創造することになる。情報も、行動も、大衆化も、そして世界化も歴史の現象として生れるものであるとすると、真理を追求し、それを倫理的に表現できる人が自由になれるという基本理念は変らない。本誌が佐藤義詮先生の追悼号として出版されるのは、「真理と自由」の精神を継承する価値があるのであり、このことをもって「歴史は前を向いて歩く」という行動を忘れまい。

一九八八年二月